

基本的モラルと社会的成功

西村和雄*

平田純一**

八木匡***

浦坂純子****

1. 序論

企業活動の基本が信用であることに対して異論を持つ者はほとんどいないであろう。企業活動にとって信用が重要であれば、高いモラルを持った労働者は、労働市場において相対的に高い市場価値を持つと考えられる。企業の信用と労働者のモラルは一般に同じではないが、両者は相互に密接な関連性を有し、生産の効率性を高める効果を持ち、経済の発展に正の影響を与えると考えられる。

これらの問題を扱った既存研究としては Heckman and Rubinstein (2001), Heckman, Stixrud, and S. Urzua (2006)があり、読み書きそろばんと言った認知能力だけでなく、コミュニケーション能力といった非認知能力が所得にどのような影響があるかを実証的に分析している。また、Datta and Simonsen(2010)は、デンマークにおいて、非認知能力向上のための教育を3歳児を対象とした公的養育施設での受けた者と家庭で受けた者を比較し、7歳時点での能力形成の違いを実証的に明らかにしている。また、Bhatt and Ogaki(2012)では、親の世界観が子供の躾を決定し、それがどのように子供の勤勉さに影響を与えているかを実証的に分析している。

本稿では、幼児期になされた躾が、その個人の成人後の労働所得に与える影響を調べることにより、幼児教育が労働市場における評価にどのような影響を与えているかを検証する。

2. 調査概要

日本における調査は、Goo Research (NTTコム オンライン・マーケティング・ソリューション株式会社)を通じて、2012年2月20日から2月24日にかけてインターネット調査によって実施している。調査票配布はGoo Research社に登録しているモニターの中から無作為に選定した90000件に対して行っており、調査票回収数16427件、有効回答数15949件であった。回収率は、18.25%である。男性比率が52.7%、女性比率が47.3%、大卒以上の学歴を持つ者の比率は49.9%、平均年齢が43.27歳(標準偏差は11.78)、全標本平均所得は346.25万円(標準偏差は329.26万円)となっている。

* 京都大学経済研究所教授

** 立命館アジア太平洋大学国際経営学部教授

*** 同志社大学経済学部教授

**** 同志社大学社会学部教授

3. 幼児期の躰と学歴形成

子ども時代に、受けた躰によって、学歴形成がどのような影響を受けたかを分析する。まず、子供の規範意識に影響を与えると考えられる躰について、躰の有無が学歴に影響を与えたかを確認している。表1ではその結果を有意水準の小さい順に示している。以下では、大卒および大学院卒を高学歴者と定義し、それ以外の学歴を非高学歴者と定義する。

有意水準1%で学歴間の差が存在しているのが、「ルールを守る」、「あいさつをする」、「勉強をする」である。

高学歴者ほど、「ルールを守る」しつけを受けたものが多いことは興味深い結果である。この点については本論文全体を通じて解釈を行うこととなる。「あいさつをする」は高学歴者よりも非高学歴者で多い点は注意を要する。

有意水準5%で学歴間の差が存在しているのが、「他人に親切にする」、「親の言うことを聞く」である。有意水準10%で学歴間の差が存在しているのが「うそをついてはいけない」であり、「ありがとうと言う」、「大きな声を出す」は学歴間で有意な差は存在していない。

なお、次節以降の議論で重要性が明らかとなる4つのモラルについての躰（「うそをついてはいけない」、「他人に親切にする」、「ルールを守る」、「勉強をする」）をすべて受けている者の高学歴者比率が55.0%であるのに対し、4つの躰をどれも受けていない者の高学歴者比率は46.5%となっており、統計的にも有意な差が生じている。

表1 学歴別躰経験分布

	非高学歴者	高学歴者
ルールを守る***	35.7%	38.4%
あいさつをする***	57.7%	55.1%
他人に親切にする**	20.2%	21.6%
勉強をする***	25.7%	30.9%
親の言うことを聞く**	33.4%	31.9%
うそをついてはいけない*	40.5%	41.9%
ありがとうと言う	38.2%	38.3%
大きな声を出す	4.6%	4.3%

注:*はそれぞれ10%水準、**は5%水準、***は1%水準で統計的に高学歴者と非高学歴者の差が有意であることを示している。

4. 躰と所得

平均所得の比較は、労働市場における評価を示している。ここでは、躰の有無別に、有業者の平均所得を比較し、躰が労働市場の評価にどのような影響を与えているかを調べる。

図1-1および図1-2で示されているように、労働市場の評価に大きな影響を与える躰は、「うそをついてはいけない」、「他人に親切にする」、「ルールを守る」、「大きな声を出す」、

「勉強をする」である。ただし、「大きな声を出す」という躰を受けた者は、表1に示すように全体の1割以下で有り、重要な躰とは判断できない。そこで、「うそをついてはいけない」、「他人に親切にする」、「ルールを守る」、「勉強をする」を基本的な「4つの基本的なモラル」と定義する。この4つのモラルの躰に関して、所得との関連を表2でまとめている。

図2では、4つの基本的なモラルの躰をすべて受けた者と、一つでも欠けた者との間で所得比較を行っており、基本的なモラルの躰をすべて受けた者はそうでない者よりも約57万円多く所得を得ていることが示されている。さらに、図3では、4つの基本的なモラルの躰をすべて受けた者と、すべて受けていない者との間で所得比較を行っており、基本的なモラルの躰をすべて受けた者はそうでない者よりも約86万円多く所得を得ていることが示されている。

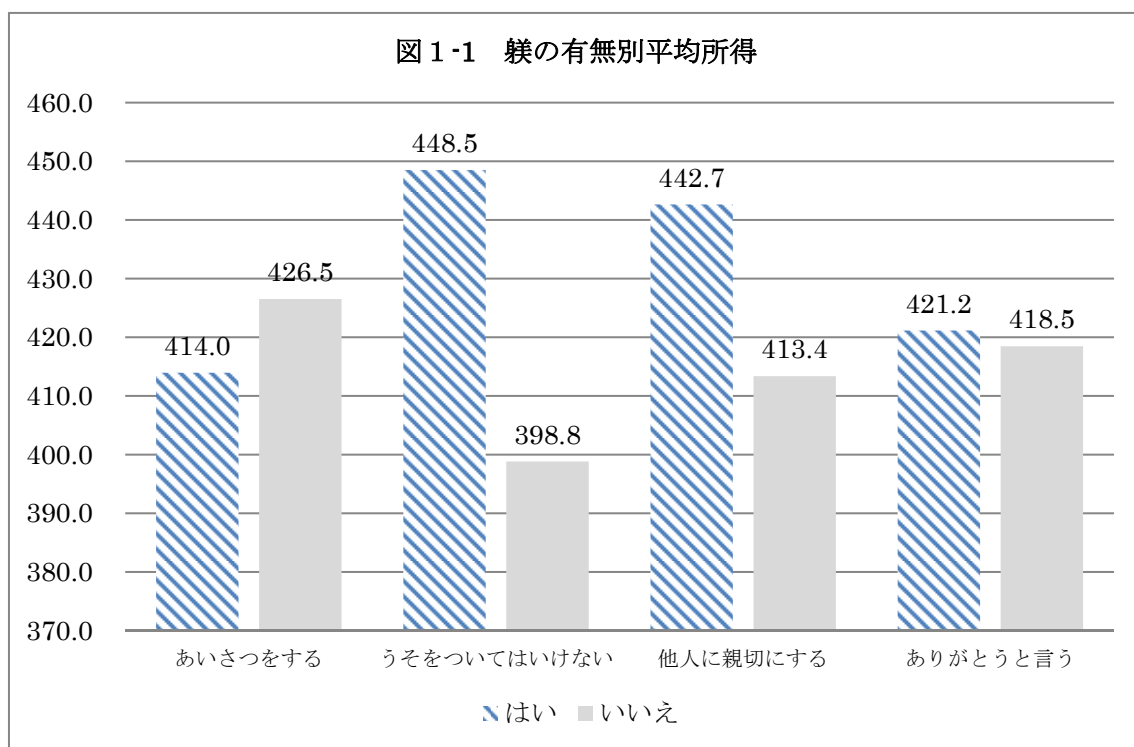


図1-2 躾の有無別平均所得

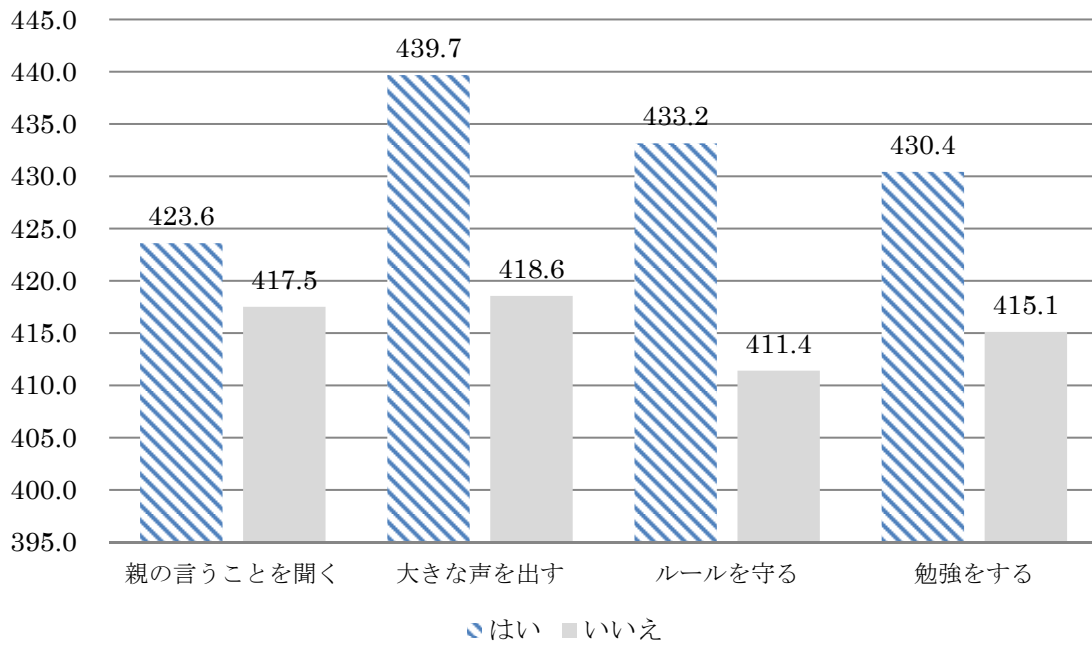
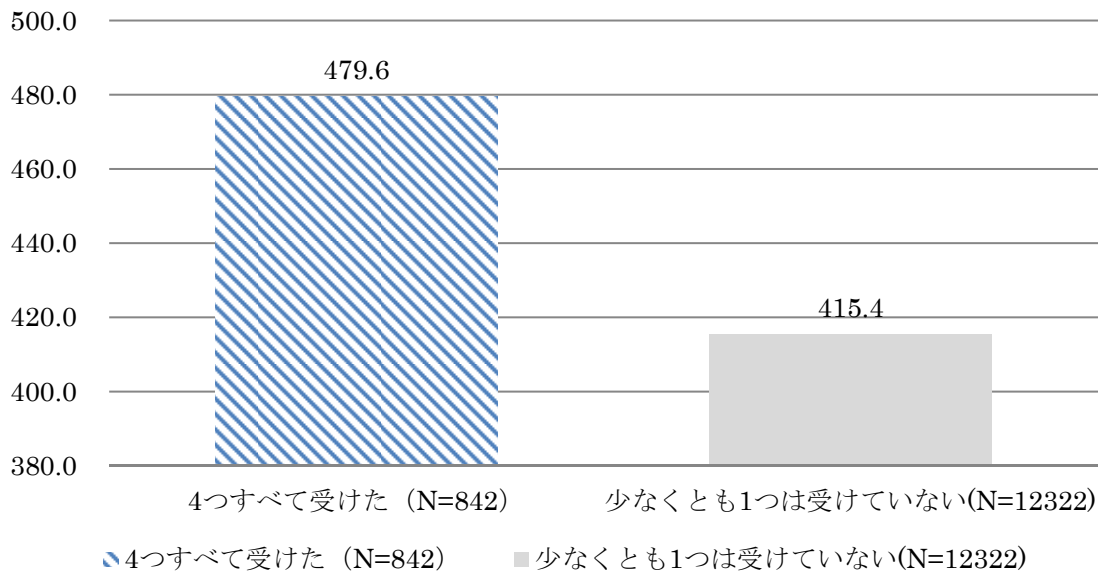


図2 4つの躾（うそをつかない、他人に親切にする、ルールを守る、勉強をする）をすべて受けた者と、少なくとも1つは受けていないものの平均所得比較



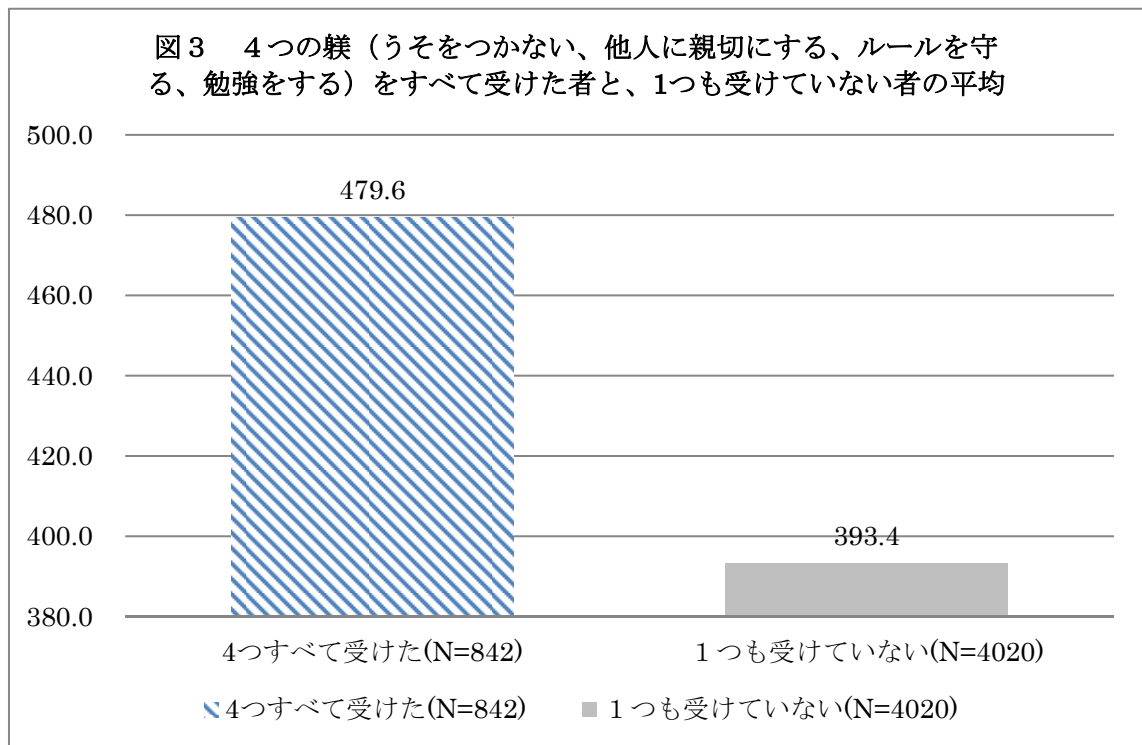


表2 4つの躰の別平均所得（万円）

	躰の有無	標本数	平均所得	所得標準偏差	平均所得の標準誤差
Q4_うそをついてはいけない	はい	5478	448.5	331.1	4.5
	いいえ	7686	398.8	305.2	3.5
Q4_他人に親切にする	はい	2759	442.7	337.0	6.4
	いいえ	10405	413.4	311.5	3.1
Q4_ルールを守る	はい	4896	433.2	331.0	4.7
	いいえ	8268	411.4	308.5	3.4
Q4_勉強をする	はい	3772	430.4	325.5	5.3
	いいえ	9392	415.1	313.7	3.2
4つのモラル	4つの躰をすべて受けた	842	479.6	363.7	12.5
	4つの躰をどれも受けてない	4020	393.4	302.1	4.8

同じ学歴でも、躰の程度の違いによって、労働市場での評価が異なり、その結果所得が異なったものになる可能性がある。ここでは、年齢、性別、学歴で所得をコントロールしながら、躰が所得に与える影響を分析する。

表3では所得に決定要因に関する重回帰分析結果を示している。なお、所得決定要因において、説明変数の高学歴ダミーは親による躰によって影響を受けると考えられるため、内生変数と考えられる。このため、この内生性の問題を処理するために、内生変数と相関があり、誤差項と独立な操作変数を用いて、2段階最小自乗法による推計を試みている。この場合のモデルは以下のように示される。

$$Y_i = \alpha + \beta D_{ei} + X_i \gamma + M_i \lambda + u_i$$

$$D_{ei}^* = \kappa_0 + O_i \kappa_1 + e_i$$

$$D_{ei} = \begin{cases} 0 & \text{if } D_{ei}^* < 0 \\ 1 & \text{if } D_{ei}^* \geq 0 \end{cases}$$

ここで、添字 i は第 i 標本を意味し、 Y は所得、 D_{ei}^* は高学歴ダミーであり、大卒以上を1とする。 X は属性ベクトルであり、 M は躰変数とする。また、 O は学歴決定に影響を与えるモデルにおける外生変数である。ここでは、操作変数として、1) 年齢、2) 男性ダミー、3) 子どもの頃、親や身近な大人に本を読んでもらった経験有無、4) 子どもの頃、親や身近な大人に勉強を教えてもらった経験の有無、5) 子どもの頃、家族そろって遊びに行った経験、6) 子どもの頃、夕食を子どもだけで食べることの有無、7) 子どもの頃、親以外の身近な大人に叱られた経験、8) 子どものころ、親に叩かれた経験、9) 「あいさつをする」躰の有無、10) 「うそをついてはいけない」躰の有無、11) 「他人に親切にする」躰の有無、12) 「ありがとうと言う」躰の有無、13) 「親の言うことを聞く」躰の有無、14) 「大きな声を出す」躰の有無、15) 「ルールを守る」躰の有無を用いる。 α 、 β 、 γ 、 λ 、 κ はパラメータであり、 u および e は誤差項を意味する。

ここでの内生変数は高学歴ダミーであるため、2段階最小自乗推定の第1段階では表2で示されるロジットモデルを用いて、高学歴ダミーの推定値を求めている。表3で示されるように、線形重回帰モデルによる推計と2段階最小自乗推定の結果は近い値を取っているが、躰関係の説明変数において有意性が高まっている。Durbin-Wu-Hausman 統計量からも内生性が確認されており、このことは、線形重回帰モデルにおける内生性バイアスが除去されることにより、躰の役割がより明確になったと言えよう。

ここから示されている結果として、「うそをついてはいけない」、「他人に親切にする」、「ルールを守る」「勉強をする」が統計的に有意で正の符号を取っていることが示されている。興味深い点は、「うそをついてはいけない」、「他人に親切にする」が学歴形成への影響において統計的に有意で無かったにもかかわらず、所得決定において有意に正となっている点である。また、「ルールを守る」は高学歴ダミー、労働市場における評価共に正で有意になっていることは重要となっている。

この分析結果が持つ含意については、いくつかの点から検討が必要である。第1は、なぜこれらの4つのモラルが、労働市場における評価として重要な意味を持っているのかである。この問題を考える上で、社会規範と労働市場における関係について議論する必要が

ある。第 2 は、これら 4 つのモラル以外が、社会規範としては重要であると考えられているにもかかわらず、労働市場での評価と結びついていない理由を検討する必要がある。考えられる仮説として、次のようなものがある。まず、モラルの中でも、労働市場が最も重視する項目が「ルールを守る」である。企業は組織の効率性を高めるために、様々なルールを設定するが、ルール遵守をモニターするために様々な形で費用を負担している。例えば、経費管理などは一つの例である。ルール遵守の精神が浸透している場合には、モニタリング費用を少なくすることが可能であるため、企業は個々の労働者がルール遵守の精神があるか否かを日常的な会話、行動等の中で評価していることとなる。そのため、ルール遵守の精神が浸透している労働者は、昇進する可能性が相対的に高くなり、高所得となるというものである。

学歴形成においてモラルが影響を与えるメカニズムは、直接的には存在していないと考えられる。その基本的な理由は、大学への選抜システムにおいては、企業のように長期間に亘って評価することができないためである。一般選抜試験であれば、学力のみが評価され、モラルの程度が選抜に反映されることはない。推薦入学制度であれば、高等学校の校長による推薦が必要なため、ルールを破った経験があるものは排除される。しかし、ルールを大きく破った経験が無い限り、内申点にルール遵守の精神をどれほど有しているかは反映されることは少ないと考えられる。そこで考えられるのが、学力形成にモラルが影響するかである。窪田康平、大垣昌夫(2013)では、幼児期に厳格な躾を受けた子どもは、学習時間が長くなることを示している。「ルールを守る」ことを躾けられた子どもが、学習習慣をより良く形成する場合には、学歴形成にプラスの効果を持つと理解できる。

表 3 所得に決定要因に関する重回帰分析結果（有業者のみ対象）

	線形重回帰分析			2段階最小自乗法		
	B	標準化係数	有意確率	B	標準化係数	有意確率
(定数)	60.014		.000	114.866		.000
年齢	2.893	.107	.000	2.726	.101	.000
男性ダミー	238.570	.367	.000	240.221	.370	.000
あいさつをする	1.098	.002	.837	.379	.001	.945
うそをついてはいけない	18.539	.029	.000	18.514	.029	.001
他人に親切にする	13.719	.018	.037	15.379	.020	.023
ありがとうと言う	6.490	.010	.263	6.906	.011	.247
親の言うことを聞く	-8.063	-.012	.130	-9.200	-.014	.094
大きな声を出す	4.219	.003	.720	1.065	.001	.930
ルールを守る	8.460	.013	.119	10.828	.016	.053

日本高学歴ダミー、予測値	139.322	.219	.000	44.205	.069	.000
従属変数 STDincome	調整済み R2=0.262			調整済み R2=0.219		

(Durbin-Wu-Hausman (DWH) test=-68.6, p-value<0.01)

5. 躰が倫理観に与える影響

本節では、14種類の社会的行為や判断に対して、1. そう思わない、2. どちらかと言えばそう思わない、3. どちらかと言えばそう思う、4. そう思う、といった4段階の評価で回答を得て、どのような躰が、それぞれの倫理的判断に強い影響を与えているかを分析する。分析では、回答モラルの数値を、8つの種類の躰の有無を説明変数として線形重回帰し、係数間の比較が可能な標準化係数を躰間で比較する方法を取る。

まず、アンケートの問と価値判断の要約統計量を示すと次のようになる。

表4 倫理的判断

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差
急いでいる場合は、行列の途中で割り込んでもよい	15804	1.1364	.45078	.00359
酒を飲んだら絶対に運転してはいけない	15885	3.8239	.58911	.00467
年老いた親の面倒は子どもが見るべきである	15163	3.0405	.79269	.00644
政治家が利権や不正な資金を手するのはやむを得ない	15466	1.2935	.63822	.00513
不正を発見すれば、速やかに通告すべきである	15168	3.2377	.69558	.00565
面倒事にはなるべく関わりたいくない	15443	3.0500	.76856	.00618
ライバルが困っていても手を差し伸べようとは思わない	14367	1.9871	.79771	.00666
脱税行為は許されない	15585	3.4870	.74414	.00596
法令順守はどんな場合でも最優先される	14432	2.8293	.82227	.00684

以下では、それぞれの問いに対して、どの躰を受けることが、その問いで述べられる行為を是認するかを分析した。もちろん、多くの場合、一般の社会通念と思われる判断をしているが、問と躰によっては、社会通念と逆の反応がある。その点に注意をしながら、各

問と躰の関係を分析する。

図 4 では、「急いでいる場合は、行列の途中で割り込んでもよい」に対して、「ルールを守る」という躰を受けたものは、「たとえ急いでいたとしても割り込むことを認めない」傾向がある。「他人に親切にする」の躰を受けたものは、「急いでいる場合は割り込を認める」傾向が強い。

「大きな声を出す」躰を受けたものが、やはり割り込みを認める傾向が強い点は興味深い。この躰が、ザック（2013）によって指摘された、利己的行動を是認し、テストステロンの分泌を促す働きをしているのかもしれない。

「あいさつをする」躰を受けた場合、割り込みを許さない傾向にある。挨拶は信頼関係を持つとする積極的行動であると理解できる。

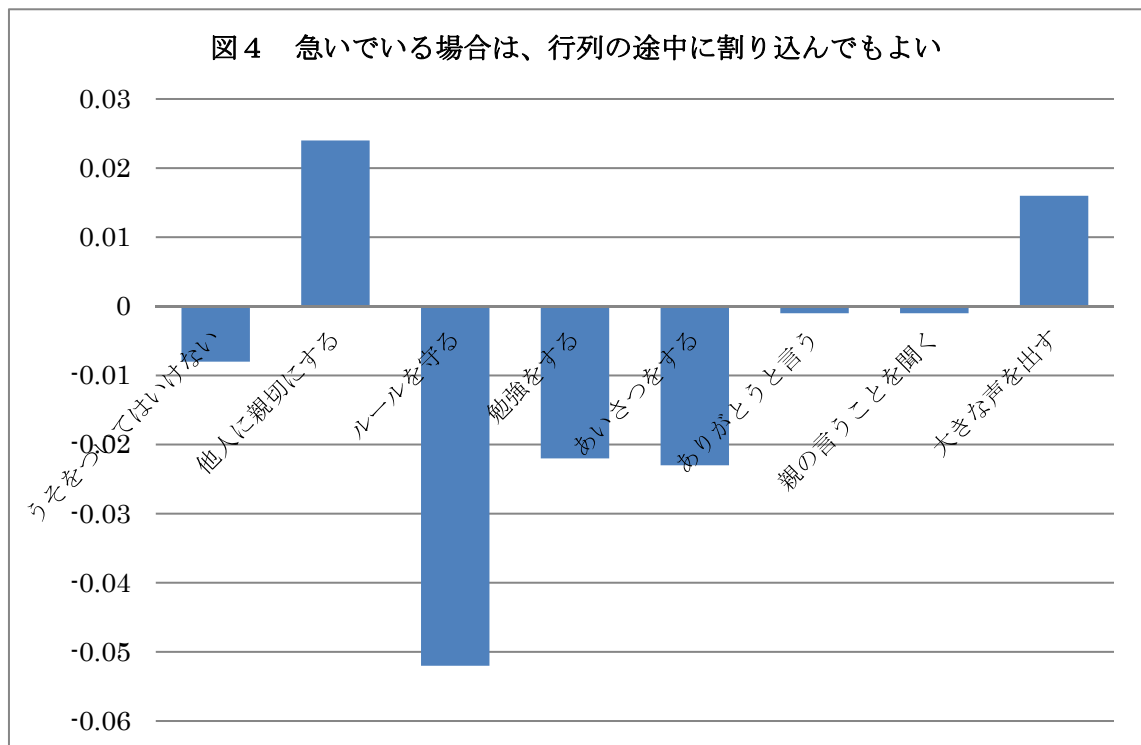


表 5 急いでいる場合は、行列の途中で割り込んでもよい

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	-.008	-.869	.385
他人に親切にする	.024	2.676	.007
ルールを守る	-.052	-5.913	.000
勉強をする	-.022	-2.678	.007
あいさつをする	-.023	-2.543	.011

ありがとうと言う	-.001	-.062	.950
親の言うことを聞く	-.001	-.124	.901
大きな声を出す	.016	1.966	.049

図 5 では、「酒を飲んだら絶対に運転してはいけない」に対して、躰がどのような影響を与えているかである。表 4 で示されているように、平均は 3.82 であり、4 に近い値をとっており、基本的にはほとんどの者がこの考えに賛成している。しかし、標準偏差は 0.6 程度あり、運転することが許容される場合もあると考えている者が一定程度いることも示されている。

「他人に親切にする」しつけを受けた者は飲酒運転を認める傾向がある。「大きな声を出す」も同様であるのは興味深い。

「あいさつをする」と「ルールを守る」しつけを受けた者が飲酒運転を認めない。「うそをついてはいけない」しつけを受けた者も飲酒運転を否定している。

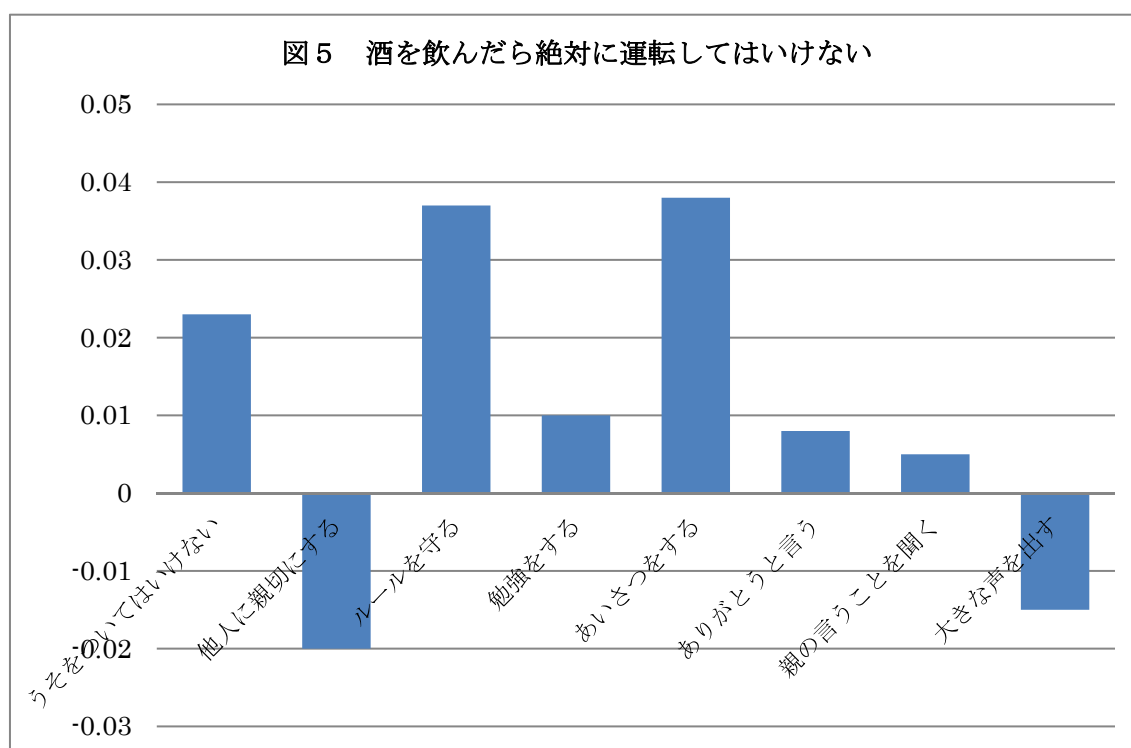


表 6 酒を飲んだら絶対に運転してはいけない

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	.023	2.658	.008
他人に親切にする	-.020	-2.172	.030
ルールを守る	.037	4.178	.000

勉強をする	.010	1.200	.230
あいさつをする	.038	4.344	.000
ありがとうと言う	.008	.854	.393
親の言うことを聞く	.005	.626	.531
大きな声を出す	-.015	-1.913	.056

図6では、「年老いた親の面倒は子どもが見るべきである」に対する躰の影響を示している。統計的に有意な躰に関しては、すべての躰について、これに同意をする傾向にある。「親の面倒を見る」人は少なくなっているとはいえ、まだそれを子供の義務とする考え方が確認できる。

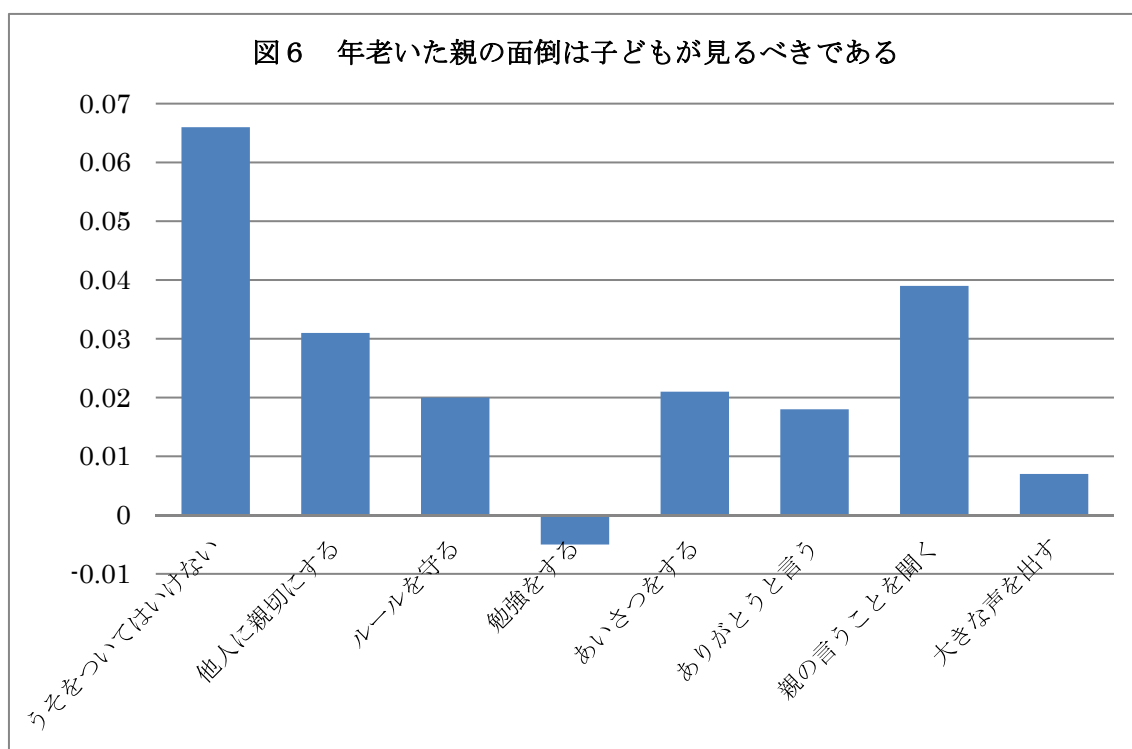


表7 年老いた親の面倒は子どもが見るべきである

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	.066	7.518	.000
他人に親切にする	.031	3.424	.001
ルールを守る	.020	2.218	.027
勉強をする	-.005	-.614	.539
あいさつをする	.021	2.368	.018

ありがとうと言う	.018	1.905	.057
親の言うことを聞く	.039	4.561	.000
大きな声を出す	.007	.803	.422

図7では、「政治家が利権や不正な資金を入手するのはやむを得ない」に対して、躰の影響を示している。表4で示されているように、平均値が1.29となっており、このモラル判断に対しては両国とも基本的に同意していない。

「大声を出す」しつけを受けたものは、政治家の汚職を是認する傾向が高い。「他人に親切にする」しつけを受けた者もその傾向が強い。

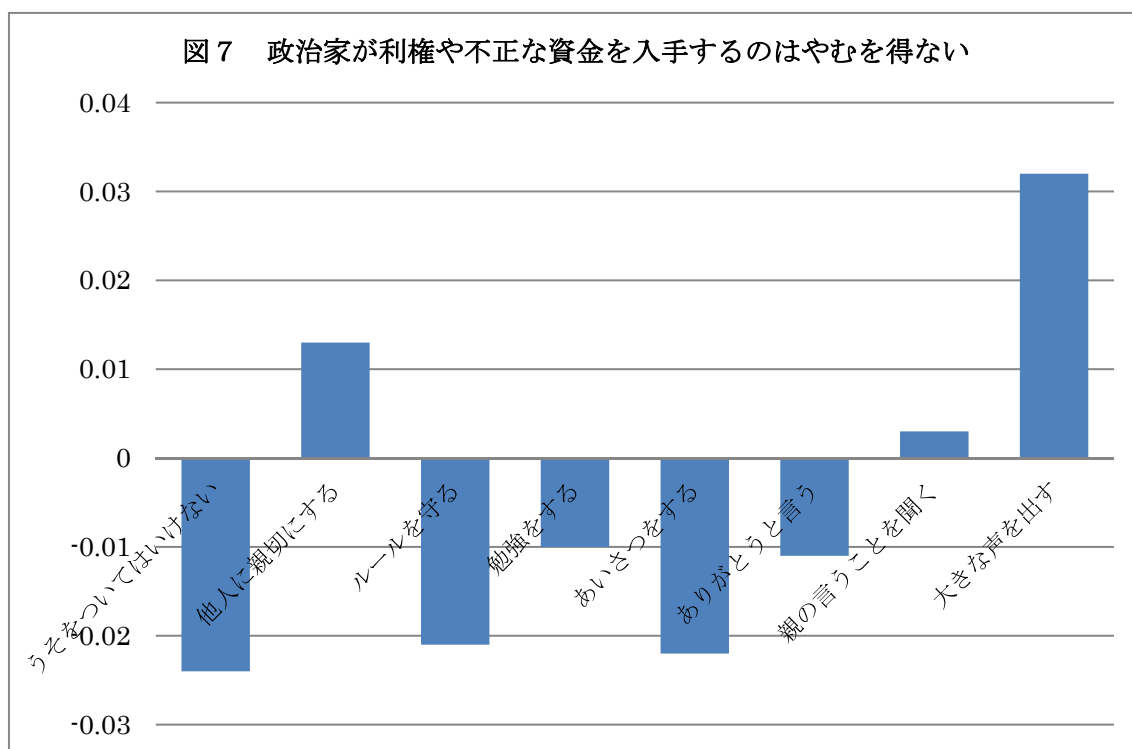


表8 政治家が利権や不正な資金を入手するのはやむを得ない

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	-.024	-2.750	.006
他人に親切にする	.013	1.423	.155
ルールを守る	-.021	-2.310	.021
勉強をする	-.010	-1.142	.254
あいさつをする	-.022	-2.456	.014
ありがとうと言う	-.011	-1.167	.243

親の言うことを聞く	.003	.368	.713
大きな声を出す	.032	3.901	.000

図8では、「不正を発見すれば、速やかに通告すべきである」に対する、躰の影響を示している。「うそをつかない」と「ルールを守る」などの躰を受けた者が同意する傾向にある。「ルールを守る」については理解しやすいが、「うそをつかない」が強い影響を与えている点は興味深い。

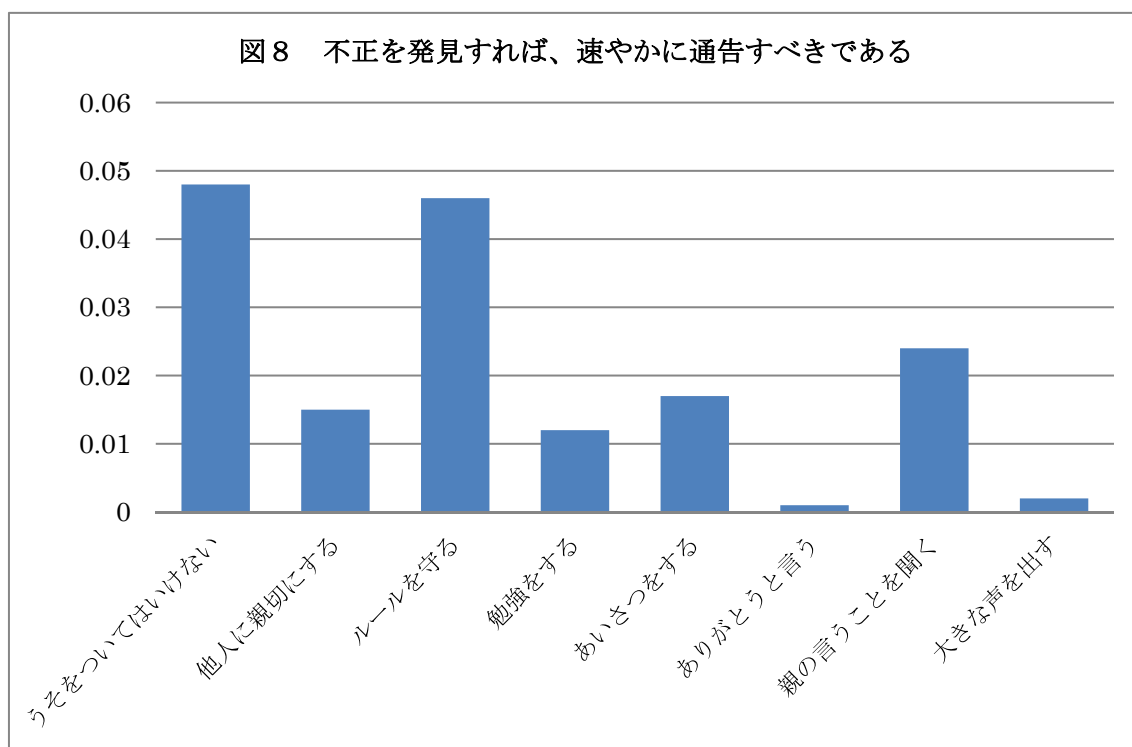


表9 不正を発見すれば、速やかに通告すべきである

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	.048	5.415	.000
他人に親切にする	.015	1.646	.100
ルールを守る	.046	5.097	.000
勉強をする	.012	1.452	.146
あいさつをする	.017	1.870	.061
ありがとうと言う	.001	.063	.950
親の言うことを聞く	.024	2.725	.006
大きな声を出す	.002	.289	.772

図9では、「面倒事にはなるべく関わりたくない」に対する、躰の影響を示している。「親の言うことを聞く」、「大きな声を出す」、「勉強をする」しつけを受けた者がこれを認める傾向がある。これは、利己的行動をこれらの躰が誘発することを示している。これに対して、利他的な行動を誘発する躰は、これを否定するように働いていることが示されている。

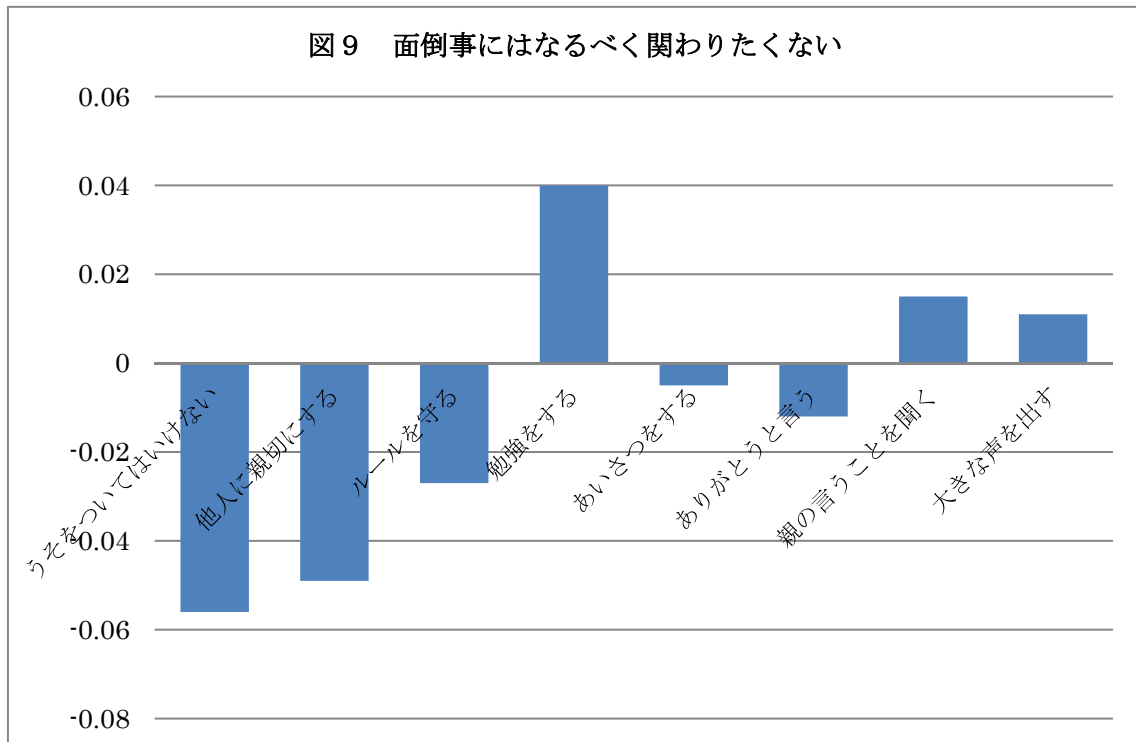


表10 面倒事にはなるべく関わりたくない

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	-.056	-6.419	.000
他人に親切にする	-.049	-5.436	.000
ルールを守る	-.027	-2.999	.003
勉強をする	.040	4.793	.000
あいさつをする	-.005	-.578	.563
ありがとうと言う	-.012	-1.248	.212
親の言うことを聞く	.015	1.764	.078
大きな声を出す	.011	1.314	.189

図10では、「ライバルが困っていても手を差し伸べようとは思わない」に対する、躰の影響を示している。「大きな声を出す」しつけを受けた者は同意する傾向がある。利己的

動を是認するのであろう。「あいさつをする」しつけを受けた者は「ライバルが困っていても手を差し伸べようとは思わない」行為を認めていない。「あいさつをする」は社会的信頼形成の積極的行為であると理解できる。

ここで特徴的なのは、「大きな声を出す」という躰と「勉強をする」という躰がこれに対して肯定的となる。「大きな声を出す」と「勉強をする」は、強い意志と目的追求意識と結びついており、利己的価値判断を優先させることを示唆している。それに対し、「他人に親切にする」は協調および信頼と結びついており、利他的価値判断を有していると考えられる。協調的な行動を取ることを勧める躰を受けた場合には、ライバルが困っていれば、手を差し伸べる判断をすることとなる。

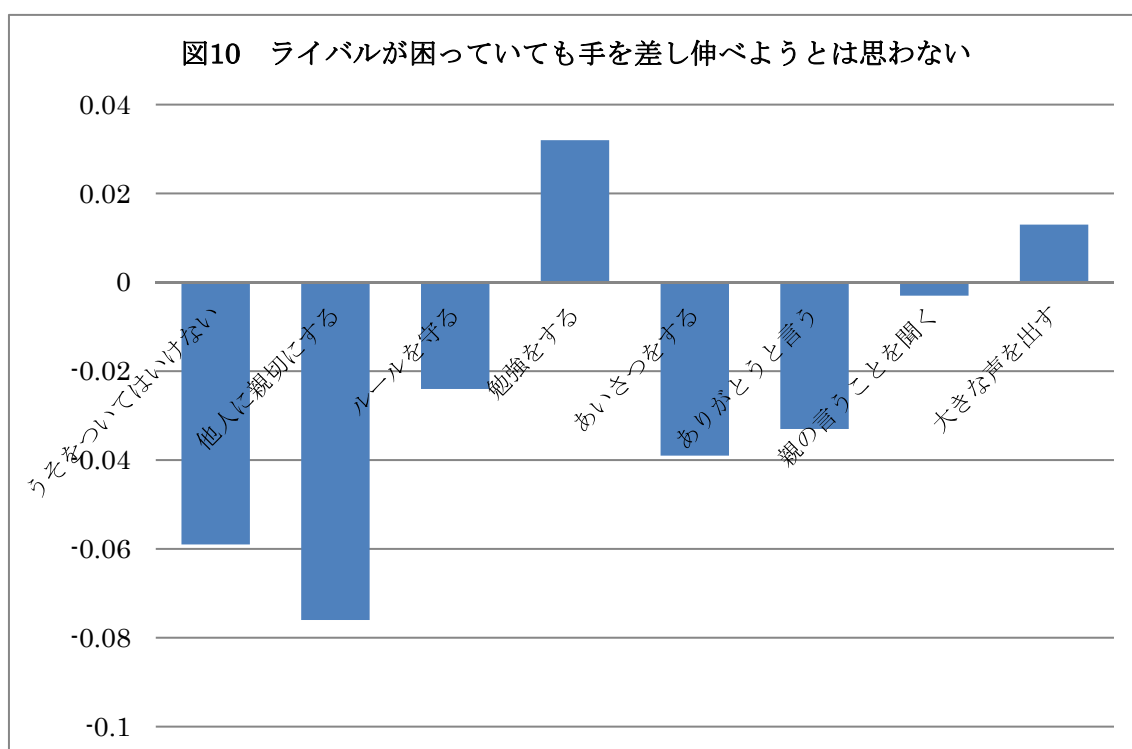


表 11 ライバルが困っていても手を差し伸べようとは思わない

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	-.059	-6.548	.000
他人に親切にする	-.076	-8.147	.000
ルールを守る	-.024	-2.591	.010
勉強をする	.032	3.712	.000
あいさつをする	-.039	-4.182	.000
ありがとうと言う	-.033	-3.325	.001
親の言うことを聞く	-.003	-.331	.741

大きな声を出す	.013	1.583	.113
---------	------	-------	------

図 11 では、「脱税行為は許されない」というモラル判断に対して、躰の影響を示している。このモラル判断には、「大きな声を出す」と「ルールを守る」という躰が強い対照的判
断を示している。「大きな声を出す」は利己的意識を形成し、目的達成のためにはルールを
破ることも認めることを許容する価値判断を醸成していることを示唆している。興味深い
のは、最も強い影響を与えている躰が「ルールを守る」であるものの、「あいさつをする」
も大きな値を取っていることである。これは、社会性を醸成することによって、肯定的な
判断をもたらすと理解できる。

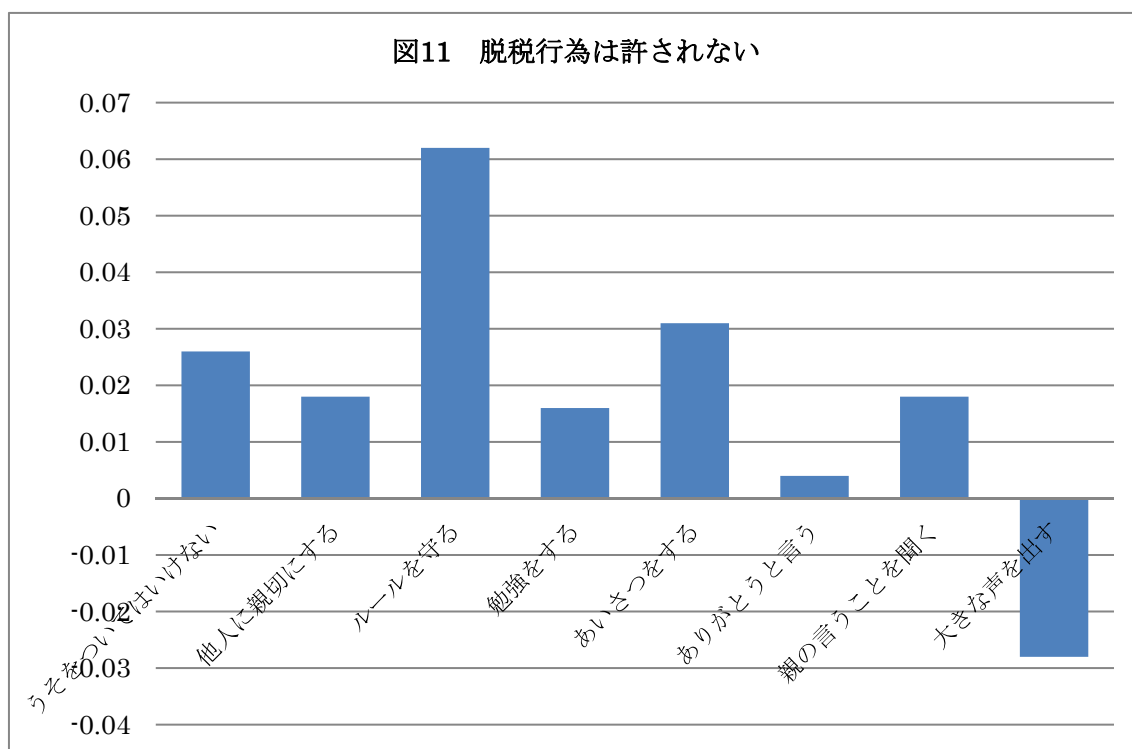


表 12 脱税行為は許されない

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	.026	2.975	.003
他人に親切にする	.018	1.992	.046
ルールを守る	.062	7.033	.000
勉強をする	.016	1.924	.054
あいさつをする	.031	3.443	.001
ありがとうと言う	.004	.377	.706

親の言うことを聞く	.018	2.063	.039
大きな声を出す	-.028	-3.490	.000

図 12 では、「法令順守はどんな場合でも最優先される」に対する、躰の影響を示している。「ルールを守る」あるいは「親の言うことを聞く」しつけを受けた者は、「法令順守はどんな場合でも最優先される」を是認する傾向があり、この躰が法令順守の意識を醸成していることを示唆する。

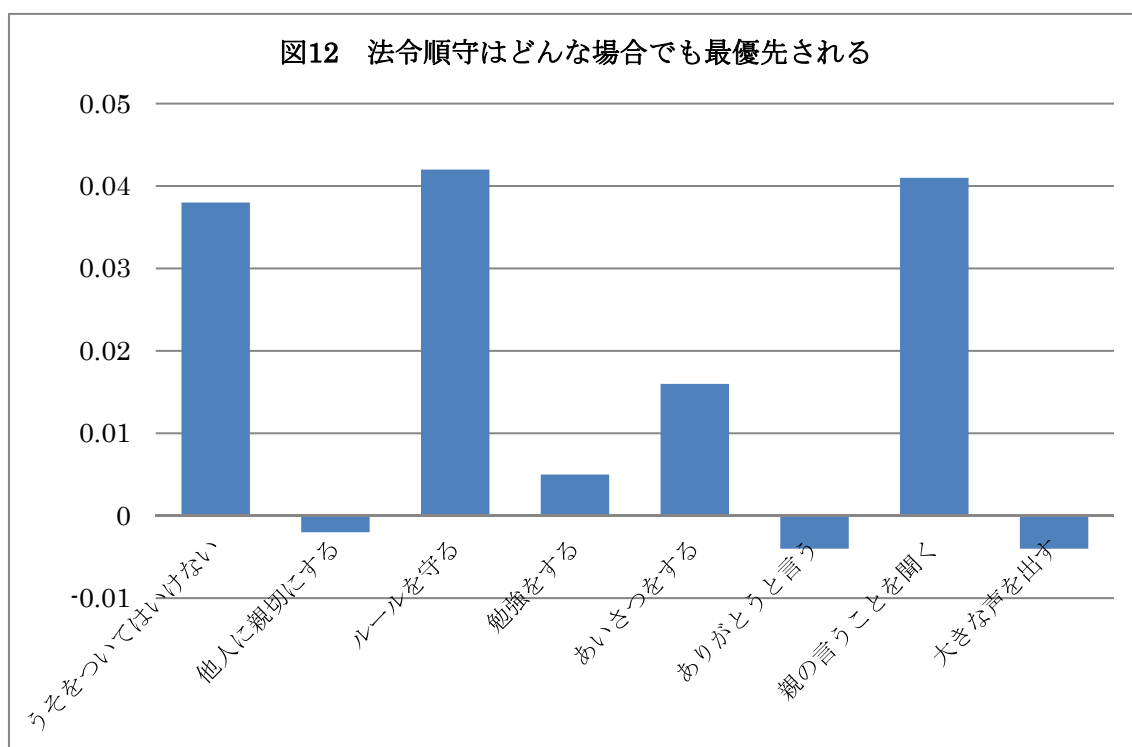


表 13 法令順守はどんな場合でも最優先される

	標準化係数	t 値	有意確率
うそをついてはいけない	.038	4.165	.000
他人に親切にする	-.002	-.262	.793
ルールを守る	.042	4.537	.000
勉強をする	.005	.523	.601
あいさつをする	.016	1.740	.082
ありがとうと言う	-.004	-.366	.714
親の言うことを聞く	.041	4.592	.000

大きな声を出す	-.004	-.488	.626
---------	-------	-------	------

次に、「うそをついてはいけない」、「他人に親切にする」、「ルールを守る」、「勉強をする」という4つの躰をすべて躰けられたものと、一つでも欠けているものの中で、倫理観がどのように異なるかを調べるために、2つのグループ間での、1. そう思わない、2. どちらかと言えばそう思わない、3. どちらかと言えばそう思う、4. そう思うといった4段階の評価で回答を得た、その数値の平均値を比較する。表14では、グループ別に標本数、平均値、標準偏差、標準誤差を示している。

表から示されているように、「急いでいる場合は、行列の途中で割り込んでもよい」と「政治家が利権や不正な資金を入手するのはやむを得ない」以外の倫理観については、4つの躰をすべて受けたものは、統計的に有意な水準で、より倫理的な判断をしていることが示されている。この表では、直感的には平均値の差が2つのグループでほとんど無いように見られるが、標本数が多く、標準偏差が小さいことから、標準誤差が極めて小さいため、2つのグループ間の差が有意であることに注意する必要がある。

以上より、4つの躰をすべて受けたものは、より倫理的な判断をおこなっていることが示されている。

表14 4つの躰をすべて受けたものと1つでも受けていないものとの倫理レベル比較

倫理項目	4つの躰 すべて 受けた	N	平均値	標準偏 差	平均値 の標準 誤差	有意 確率
急いでいる場合は、行列の途中で割り込んでもよい	受けて ない	14794	1.1378	.45103	.00371	.132
酒を飲んだら絶対に運転してはいけない	受けた	1010	1.1158	.44682	.01406	
	受けて ない	14875	3.8216	.59050	.00484	.047
	受けた	1010	3.8584	.56732	.01785	
年老いた親の面倒は子どもが見るべきである	受けて ない	14186	3.0283	.79231	.00665	.000
	受けた	977	3.2170	.77750	.02487	
政治家が利権や不正な資金を入手するのはやむを得ない	受けて ない	14480	1.2950	.63822	.00530	.269
	受けた	986	1.2718	.63817	.02032	

不正を発見すれば、速やかに通告すべきである	受けて	14194	3.2269	.69662	.00585	.000
	ない					
面倒事にはなるべく関わりたくない	受けた	974	3.3953	.66076	.02117	.004
	受けて	14458	3.0550	.76322	.00635	
ライバルが困っていても手を差し伸べようとは思わない	ない	985	2.9766	.84009	.02677	.000
	受けて	13416	2.0009	.79666	.00688	
脱税行為は許されない	受けた	951	1.7918	.78725	.02553	.000
	受けて	14592	3.4762	.74846	.00620	
法令順守はどんな場合でも最優先される	ない	993	3.6455	.65779	.02087	.000
	受けた	13492	2.8203	.82252	.00708	
	受けた	940	2.9585	.80823	.02636	

次に、「うそをついてはいけない」、「他人に親切にする」、「ルールを守る」、「勉強をする」という4つの躰をすべて躰けられたものと、これらを一つも受けていないものとの間で、倫理観がどのように異なるかを調べるために、2つのグループ間で選んだ回答の数値の平均値を比較する。表15では、グループ別に標本数、平均値、標準偏差、標準誤差を示している。

表15から示されているように、「政治家が利権や不正な資金を入手するのはやむを得ない」以外は、4つのモラルをすべて受けたものは、どれも受けていないものよりも、統計的に強い有意性をもって、より倫理的な判断を行っていることが示されている。

表15 4つの躰をすべて受けたものと1つでも受けていないものとの倫理レベル比較

4つの躰	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差	有意確率
どれも受けてない	4886	1.1560	.48120	.00688	.010
急いでいる場合は、行列の途中で割り込んでよい	1010	1.1158	.44682	.01406	
酒を飲んだら絶対に運転してはいけない	4920	3.7880	.63379	.00904	.000

	すべて受	1010	3.8584	.56732	.01785	
	けた					
	どれも受	4653	2.9467	.83285	.01221	
年長いた親の面倒は子どもが見るべき	けてない					.000
である	すべて受	977	3.2170	.77750	.02487	
	けた					
	どれも受	4766	1.3086	.65479	.00948	
政治家が利権や不正な資金を入手する	けてない					.101
のはやむを得ない	すべて受	986	1.2718	.63817	.02032	
	けた					
	どれも受	4646	3.1851	.71713	.01052	
不正を発見すれば、速やかに通告すべ	けてない					.000
きである	すべて受	974	3.3953	.66076	.02117	
	けた					
	どれも受	4769	3.1048	.75440	.01092	
面倒事にはなるべく関わりたくない	けてない					.000
	すべて受	985	2.9766	.84009	.02677	
	けた					
	どれも受	4361	2.0695	.83363	.01262	
ライバルが困っていても手を差し伸べ	けてない					.000
ようとは思わない	すべて受	951	1.7918	.78725	.02553	
	けた					
	どれも受	4808	3.4183	.78017	.01125	
脱税行為は許されない	けてない					.000
	すべて受	993	3.6455	.65779	.02087	
	けた					
	どれも受	4387	2.7680	.83660	.01263	
法令順守はどんな場合でも最優先され	けてない					.000
る	すべて受	940	2.9585	.80823	.02636	
	けた					

5. 結語

本稿では、躰の労働市場での評価と社会的意義について分析を行った。この分析を通じて、「他人に親切にする」、「うそをつかない」、「ルールを守る」、「勉強をする」という躰が、数多くある躰の中でも特に重要な意味を有していることが示された。利他的な考えをめぐ

くみ、信頼を醸成し社会性を高めるような躰が、労働市場での評価を高めるという分析結果は、ザック(2013)で議論されている、「信頼が経済的発展をもたらす」というメッセージと共通したものである。ザックが人間の生理的反応メカニズムの分析を行う神経経済学の手法でこのメッセージを導き出したのに対し、本稿では認知プロセスの育成メカニズムを解明することにより、同様なメッセージを導いているのが特徴と言えよう。

参考文献

- Bhatt, V., and M. Ogaki (2012) “Tough Love and Intergenerational Altruism,” *International Economic Review*, vol.53, no.3, pp.791-814.
- Heckman J. J., J. Stixrud, and S. Urzua (2006) “The Effects of Cognitive and Noncognitive Abilities on Labor Market Outcomes and Social Behavior,” *Journal of Labor Economics*, vol.24, no.3, pp.411-482.
- Heckman J. J., and Y. Rubinstein (2001) “The Importance of Noncognitive Skills: Lessons from the GED Testing Program,” *American Economic Review*, vol.91, no.2, pp.145-149.
- Datta, Gupta, Nabanita and Marianne Simonsen(2010), “Non-cognitive child outcomes and universal high quality child care” *Journal of Public Economics*, Volume 94, Issues 1–2, February 2010, Pages 30-43.
- 窪田康平、大垣昌夫(2013)、「勤勉さの文化伝達-親のしつけと世界観-」、mimeo.
- ザック、ポール(2013)、「経済は「競争」では繁栄しない-信頼ホルモン「オキシトシン」が解き明かす愛と共感の神経経済学-」(*The Moral Molecule*: 柴田裕之訳)、ダイヤモンド社。